

青年期の自己信頼感尺度作成の試み

寺崎, 文香
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/18428>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 10, pp.159-166, 2009-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

青年期の自己信頼感尺度作成の試み

寺崎 文香 九州大学人間環境学府

An attempt to make the scale of measure 'Self Trust'

Fumika Terasaki (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Erikson said that 'basic trust' is gained from good care from the mother in infancy and is maintained through the life cycle as trust toward self and world. The purpose of this study is to understand the construction of the sense of trust in adolescence as derived from the trust of the internalized stable mother. To examine it, the 'self-trust' scale was constructed. As the result of factor analysis of the scale administered to the high-school students, this scale was made of 5 factors, and they were named 'trust not to annihilate', 'lack of self-confidence', 'trust of self through the relationship with others', 'trust of the continuity of self', and 'trust of control of self'. Furthermore, the relationships between the self-trust scale and the 'inner object' scale that reflects quality of one's internalized object were examined. In conclusion, it was found how the self trust affects to the inner object in adolescence.

Key Words: adolescence, self-trust, inner object, factor analysis

I. 問題と目的

「信頼」という言葉は非常に一般的な言葉である。信頼とは、「相手方を信用して、疑う気持ちなく任せきりにすること、どんな点から見ても誤り(過ち)のない物として、信用すること」(新明解国語辞典, 2001)とされる。天貝(1995, 1997)は、信頼感を「自分あるいは他人(他の対象)に対して抱く信頼できるという気持ち」と定義し、安定した信頼感を持つ場合、人は他者をより支持的であると感じ、対人的問題を感じる数が少ないと述べた。すなわち、信頼感は一一般に対するの肯定的な概念を形成し、これはまた自己概念の発達にも有効な役割を果たすと考えられる。また、酒井(2001a, 2001b, 2002b)、酒井他(2002a)はアタッチメント理論の視点から、信頼感の対人的な側面に注目した。酒井は愛着対象に対する信頼感が「愛着関係における自己評価」(相手にとって自分は信頼される価値のある存在と思えるかどうか、という側面)と「愛着関係における他者評価」(自分にとって相手は信頼できる存在であると思えるかどうか、という側面)の2側面を持つものとした。その児童・思春期から青年期を対象とした一連の研究の中で、酒井は対人的信頼感が高いことが、学校での適応や精神的健康に影響することを示し(2002a)、中でも特に「自分は親密な他者から信頼される存在であると思える」ことの重要性を強調した(2002b)。

では、これらの「信頼感」はどのようにして培われるものなのであろうか。天貝、酒井両者ともに青年期の信頼感について得られた知見を報告しているが、特にその

「他者への信頼」という対他的な側面、または他者からの信頼を通して自己への信頼を育むという過程を通して、青年の現実の關係に依存する信頼感についての側面が中心に扱われている。例えば天貝(1995)は、「信頼は一般的な特質と言うよりは[獲得された]特殊の具体的な特質である」という社会的学習理論をもとにした Rotter の理論を引用し、信頼感の可変性と能動性を主張した。しかし、そもそもその概念を発展させるに当たり、天貝は基本的信頼(basic trust)の獲得を提唱した Erikson(1950)の概念を、また酒井は Bowlby(1969, 1973, 1980)の内的作業モデルをベースにしており、このことから、信頼感の派生が幼少期にまで遡ることが示唆されている。つまり、青年の信頼感を形成するものが、青年期になって初めて外界から獲得されるものだけではないことが示唆されており、これについてさらなる検討の必要性が浮き彫りになる。本研究では特に、信頼感の派生とそれが青年期に影響していく過程について考察するために、Eriksonの理論から信頼感について検討することとする。

Erikson(1950)は、人生最初の心理社会的危機は「基本的信頼対不信」であると述べた。Eriksonは「幼児期と社会」(1950)の中で、乳児が母親との暖かな関係や十分な世話をされることを通して、世界に対する信頼感を築き上げることの重要性を指摘している。それによれば、信頼することの一般的な状態とは「必要物を供給してくれる外的存在が常に同じであること、連続性を有していることを期待すること」、「自己を信頼し、様々な衝動に対処する自分の諸機関の能力を信頼すること」を意味する。さらに Erikson(1950)は、「母親がいなく

なってもむやみに心配したり怒ったりしないで、母親の不在を快く受け入れるようになること」が乳児の成し遂げる最初の社会的行為であると述べている。それは母親が予測できる外的存在になったということばかりでなく、内的な確実性を持つようになったということの意味している。このことは Mahler (1972b) が分離個体化理論の中で述べている「対象恒常性」の獲得をも意味している。Mahler (1972b) は、分離と再接近期の危機を経て、「母親が目の前にいなくてもどこか別のところにおいて見つかるはずだ、と気付くことのできる能力」(Masterson, 2000) を確立し、対象の永続性、恒常性を獲得すると述べた。さらにそうした経験の一貫性や、連続性、斉一性が自我同一性の基本的観念を準備する。ここで言う一貫性・連続性とは「現在が自分の過去にしっかりねざしていることに確信が持てるかどうかの歴史的感覚」でもあり、将来への現実的な自分へと繋がる、「自分を支える重要な心理要件」である(鑑, 2002)。谷 (1998) は基本的信頼感が得られていないということは自己の時間的連続性も得られないということの意味すると考え、それ故に自己連続性・斉一性が拡散した状態を呈しやすいことを主張した。つまりこの基本的信頼の感覚は幼児期以降の発達段階においても維持され、特にこの斉一性と連続性に対する信頼が再び問題となり、青年期の獲得課題である同一性に大きく影響を及ぼすのである。

これらのことから、この幼少期に派生する信頼感とは自分が安定した存在であるという感覚や同一性へと繋がる、対自的な信頼感に深くかかわるものであることが示唆される。つまり、青年の持つ信頼感とは幼少期の母親との関係の中でその基礎が形作られるが、天貝 (1995) らの述べるような、その後現実的な他者との関係の中で失われたり再び獲得されたりしながら育まれる対他的な信頼感と、自己の存続や能力に対する対自的な信頼感との2つの側面を持つと考えられる。自分に対する信頼感とは、「剥奪されたという感覚、分裂したという感覚、捨てられたという感覚」(Erikson, 1950) からその人を守り、フラストレーションに耐える力を培うものである。そして自分自身は信ずるに足る人間であるという、青年の適応を支える重要な感覚として育つものとなるが、信頼感の対自的な側面に関しては先行研究であまり述べられていない。これらのことを受けて、本論では青年の持つ信頼感のうちの対自的な側面を「自己信頼感」とし、これを主眼に検討することとする。「自己信頼感」は Erikson (1950) の述べるように、自己の存続に関わる重要な他者(母親)の連続性や一貫性に対する信頼、および恒常性の獲得から派生しているものとし、「自己の連続性や一貫性への信頼」、「外的な諸問題とフラストレーションに対処する能力に対する信頼」、「自己の身体的・精神的統制に対する信頼」が内包されているものと定義する。

そこで、その構造について検討し、青年が意識的に抱くことのできる自分への信頼感について調べるために、尺度の作成を試みることを第一の目的とする。

また本研究で作成する自己信頼感が、定義された意味を含有するもの、すなわち安定した対象の内面化に関連するものであることを検証するために、その人の内的な表象を保持する能力を測定する尺度との関連を検討する。重松 (2005) は青年期の境界例心性について、「愛情対象が不在のときにその表象を保持する」能力の欠如や「情緒の対象恒常性が確立していない」という内的対象の側面から検討し、非臨床群の内面化された対象や記憶を想起する能力を測る「内的対象尺度」を作成した。本研究では、作成する自己信頼感尺度の基準連関妥当性を確認するために、内的対象尺度得点との関連を検討することを第二の目的とする。また自己信頼感尺度は複数の因子から構成されることが想定されるが、それぞれの因子が対象を保持する能力またはその安定性にどのように関係するのかが検討する。

II. 方法

1. 自己信頼感尺度項目の収集

自己信頼感に関する項目を収集するために、心理学を専攻する大学院生13名を対象に調査を行い、自由記述での回答を得た。具体的な質問内容は以下のとおりである。1) 自分のことが信頼できると感じるのはどのような場面(とき)ですか。2) 自分のことが信頼できないと感じるのはどのような場面(とき)ですか。また、信頼感に関する先行研究(天貝, 1995, 谷, 1998, 酒井, 2001a)からも自己への信頼感に関する項目を収集した。項目は上述した定義に基づき選択され、類似の項目や不適切な項目を削除し、さらに2名の心理学を専攻する学生と検討し、45項目を選定した。なお本研究では、先述したように対他的な信頼感とは質の異なるものとして考えられるため、対自的な信頼感を中心に扱うこととした。しかし自由記述の回答において、他者の視点を介した自分に対する信頼感についての項目が得られた。これは単なる他者への信頼感と異なり、自分に対する信頼感の側面を含むものであると考えられたため、除外せずに分析に含めることとした。

2. 自己信頼感尺度の項目選定及び因子分析

1) 対象と調査時期

X県内の県立A高校(男子454名、女子57名)および私立B高校(男子74名、女子54名)の2校を対象とし、2006年3月~11月に実施した。A高校においては、ホームルーム終了後一斉実施、B高校においては個別に配布して実施された。教示は、各クラス担任または

配布担当の教諭が、筆者の定めた教示を読み上げることが統一した。

2) 調査内容

自己信頼感尺度の暫定項目 (45 項目) を用い、高校生の自己信頼感について、「非常に当てはまる」「当てはまる」「やや当てはまる」「あまり当てはまらない」「当てはまらない」「全く当てはまらない」の 6 件法で回答を求め、信頼感が高いほど高得点になるようにされた。因子分析に基づく項目の選定を行い、尺度を作成し、因子間相関を求めた。

3. 自己信頼感尺度及び内的対象尺度における相関分析

1) 対象と調査時期

2 で質問紙を配布した被検者のうち、内的対象尺度の実施に関する許可が得られた A 高校の被検者および、B 高校において担当教諭および本人に同意が得られた被検者に、内的対象尺度を実施した。調査時期は 2 と同様である。

2) 調査内容

(1) 2 で作成した自己信頼感尺度

(2) 内的対象尺度 (重松, 2005) : 有効回答数は、男子 317 名、女子 62 名、計 379 名であった。内的対象尺度の項目数は 24 項目であり、7 件法で、「永続しない対象」「悪い対象」「良い対象」の 3 因子から構成されている。総得点を「内的対象得点」とされ、肯定的な愛情対象が想起できないほど高得点となるようにされている。

Ⅲ. 結果と考察

1. 自己信頼感尺度の因子分析結果

最終的な有効標本数は、508 名 (男子 : 410 名、女子 : 98 名) であった。全 45 項目のうち、まず天井効果の見られる 3 項目を削除した 42 項目について因子数 8 から順次因子数を減らして分析を行った。因子負荷量が .35 以下の項目を除き、再度同様の因子分析を行う手順を行い、5 因子を抽出した (一般化された最小 2 乗法、Promax 回転)。その結果、29 項目の信頼感項目が選定された (Table 1)。因子 は、「私はたとえ失敗しようとも問題に立ち向かうことができると思う (.78)」、「私はつらい状況にあるときも、なんとかその状況を変えていけるだろうと思う (.59)」に代表される 9 項目から構成され、ストレスフルなライフイベントやフラストレーションに耐える力に対する信頼感が述べられているものと考えられたため、「自己が壊れてしまわないという信頼」と命名された。これらの項目の尺度得点から算出された α 係数は .83 であった。因子 は、「私は自分を頼りないと思うことがある (.50)」「私は自分のこころ

が傷つくのを恐れている (.47)」などから成る 6 項目から構成された。この因子は全て逆転項目から構成されており、傷つくことへの不安や不安定感について述べているため「自信のなさ」と命名され、 α 係数は .70 であった。因子 は、「私は、人に受け入れてもらえると思う (.64)」「私のいいところは、人からも褒められる (.61)」などの 5 項目から構成される。Erikson (1950) は、青年期について「他人の目に自分がどのような人間に映っているかと言うことが第一の関心事となる」と述べており、これらの項目は、自己の価値や長所などに関して、一旦他者の視点を意識し、他者の目を通した自己の存在意義を確認するといった形での自分への信頼感を意味している。そこで因子 は「他者との関係を通した自己への信頼」と命名され、 α 係数は .62 であった。因子 は、「自分の将来には、希望が持てる (.66)」「自分の将来を考えると、どうなるのかとも不安になる (.55)」など 4 項目から構成され、他の項目が現在の自己への信頼感の側面であるのに対し、未来へと続く自己への時系列的な信頼を示す内容であることから、「自己の連続性に対する信頼」と命名され、 α 係数は .72 であった。最後に因子 は、「私は、わざとではなくても誰かを傷つけてしまう (.62)」「私は、時に自分の思ってもみないような突飛なことを言ったり行動したりしてしまう (.50)」などの 5 項目から構成され、自己の行動や情緒が自分のコントロール下にあるか否かといった感覚を示す内容であるため、「自己統制に対する信頼」と命名され、 α 係数は .62 であった。

尺度内部の一貫性を検討するために、29 項目全体に対し α 係数を算出したところ、.87 であった。本尺度は、尺度全体において十分な整合性があることが示されたため、全項目得点の合計値を持って自己信頼感全体得点とし、また各因子の合計値をもって信頼感の各下位尺度得点とすることとした。さらに各因子間において Pearson の相関係数を求めたところ (Table 1)、特に因子 「自分が壊れてしまわないという信頼」と因子 「他者との関係を通した自己への信頼」、および因子 「自己の連続性に対する信頼」においてそれぞれ $r=.515$ 、 $r=.576$ と有意な相関が認められた。一方で因子 「自己の統制に対する信頼」は、他のどの因子とも有意な相関が得られず、下位尺度の中でも独立しているものであることが示された。また自己信頼感得点およびそれぞれの因子毎の平均点、標準偏差値、範囲を Table 2 に示す。

2. 自己信頼感尺度および内的対象尺度の尺度間相関

自己信頼感総得点および因子毎の得点と内的対象尺度およびその下位因子における相関を求めた。Pearson の相関係数を、Table 3 に示す。自己信頼感総得点およびほとんどの因子においては、内的対象尺度の総得点ほと

Table 1
自己信頼感尺度因子分析結果

No.	項目	因子	因子	因子	因子	因子	共通性
因子Ⅰ：自分が壊れてしまわないという信頼							
64.	私は、たとえ失敗しようとも問題に立ち向かうことができると思う	.778	-.128	.087	-.016	.046	.679
63.	私は、人に任せられた仕事をうまくこなすことができると思う	.683	-.195	.157	-.096	.199	.597
15.	私はつらい状況にあるときも、なんとかその状況を変えていけると思う	.586	.157	-.091	.048	-.171	.512
31.	私は、困難に立ち向かえる存在であると思う	.563	.109	.056	.150	-.134	.590
72.	私は、どんな不幸に出会ってもくじけないだろうと思う	.546	.082	-.055	-.020	-.020	.373
44.	私は、一度決めたことを最後までやりとおすことができると思う	.520	.003	.128	-.032	.080	.431
26.	私は、大切なことを自分で決めることができる	.490	.074	-.021	.064	-.032	.427
25.	私には、つらいことを乗り越える力があまりないような気がする (*)	.486	.254	-.168	.240	-.056	.597
17.	私は追い込まれたときでも、自分の行動を抑えたり変えたりすることができると思う	.413	-.119	-.128	.190	.099	.394
因子Ⅱ：自信のなさ							
62.	私は人と付き合うのが下手だと思う (*)	-.073	.634	.303	-.058	-.069	.515
65.	私は、自分を頼りないと思うことがある (*)	.023	.497	.080	.042	.056	.422
46.	私は、人前で私らしく振舞えない (*)	.002	.495	.141	-.069	-.063	.317
42.	私は自分のところが傷つくのをおそれている (*)	.152	.471	-.192	-.015	.199	.466
59.	私は意志が弱い方だと思う (*)	.399	.451	-.024	-.056	-.023	.489
69.	人の目に、変な風に映っているのではないかと気になる (*)	-.113	.433	.000	.038	.099	.346
因子Ⅲ：他者との関係を通じた自己への信頼							
48.	私は、人に受け入れてもらえると思う	-.086	.164	.642	.173	-.013	.591
22.	私のいいところは、人からも褒められる	-.087	.084	.605	.093	-.101	.482
61.	私は人が元気がないとき、支えになってあげることができる	.394	.005	.544	-.244	-.065	.588
40.	私は、人の役に立っているとは思えない (*)	-.008	.225	.412	.083	.150	.407
58.	人から見た私の第一印象は、それほど悪くないと思う	.094	-.054	.391	-.025	.207	.330
因子Ⅳ：自己の連続性に対する信頼							
19.	自分の将来には、希望が持てる	.144	-.204	.269	.659	-.042	.725
53.	私には、未来がないような気がする (*)	.017	.055	.154	.586	.045	.551
9.	自分の将来を考えると、どうなるのかとても不安になる (*)	-.006	.080	-.155	.549	.079	.402
4.	私は自分の人生に対し、なんとかやっていけそうな気がする	.207	-.111	.153	.499	-.006	.537
因子Ⅴ：自己の統制に関する信頼							
28.	私は、わざとではなくても誰かを傷つけてしまう (*)	-.071	.087	.174	-.107	.619	.516
23.	私は、時に自分の思っても見ないような突飛なことを言ったり行動したりしてしまう (*)	-.014	.033	-.121	.104	.496	.479
20.	私は、すぐに怒ったり落ち込んだりしてしまう (*)	.011	.232	-.106	.138	.483	.445
3.	自分の行動や考えは、自分勝手な考えに基づいていることが多いと思う (*)	-.048	.133	.188	.005	.376	.325
14.	私は、衝動的になるようなことはほとんどない	.141	-.191	-.035	.035	.367	.218
因子間相関							
	F1	1.000	.312	.515	.576	.013	
	F2		1.000	.169	.431	.328	
	F3			1.000	.344	.098	
	F4				1.000	.097	
	F5					1.000	

(*) は逆転項目を示す

Table 2
全体の自己信頼感得点における平均値、標準偏差および範囲

	男子 (N=410)			女子 (N=98)			全体 (N=508)		
	Mean	(SD)	range	Mean	(SD)	range	Mean	(SD)	range
自己信頼感総得点	106.47	(16.00)	59-163	101.56	(17.23)	43-148	105.54	(16.33)	43-163
因子	33.98	(6.52)	16-54	32.26	(6.73)	17-51	33.65	6.59	16-54
因子	19.02	(4.97)	6-34	17.93	(4.65)	6-33	18.82	4.92	6-34
因子	18.02	(3.63)	5-28	18.03	(3.90)	6-28	18.02	3.68	5-28
因子	15.81	(3.68)	5-24	15.01	(3.98)	6-24	15.67	3.75	5-24
因子	19.63	(4.19)	7-32	18.34	(3.97)	8-27	19.39	4.17	7-32

** $p < .01$ * $p < .05$

んどの因子において 0.01%水準で有意な負の相関が得られた ($r = .128 \sim r = .560$)。

まず、自己信頼感総得点においては、内的対象尺度総得点 ($r = -.560$)、および「永続しない対象」($r = -.441$)、「悪い対象」($r = .398$)と中程度の相関が見られた。総得点間に中程度の相関が見られたことから、この2尺度間に関連があることが示唆される。

次に因子「自分が壊れてしまわないという信頼」においては、内的対象尺度総得点 ($r = .372$) においてのみ中程度の相関が見られ、それぞれの因子とは弱い相関が見られたのみであった。一方で因子「ほぼ逆転項目からなる因子「自信のなさ」においては、内的対象尺度総得点 ($r = -.402$)、「永続しない対象」($r = -.448$)との間で中程度の相関が見られ、自己信頼感総得点と近い結果となっている。また、因子「自己の連続性に対する信頼」においても、同様に内的対象尺度総得点 ($r = -.413$)と「永続しない対象」($r = -.368$)において中程度の相関が見られ、関連性が示唆された。「永続しない対象」因子における内容は、対象が将来において、もしくは目の前に居なくなったときに、今と同じ対象でいることへの確信に関する項目であり、対象が連続し一貫性を持っていることに対する安心感を表している。自己信頼感総得点およびこれらの2因子に「対象の永続性」に関する因子の関連が認められたことは、自分を信じられるという感覚が、対象が安定して存在していることを信じられるというその人の中の内的な感覚と深く関連したものであるということが出来る。つまり、他者の連続性および恒常性に対する信頼や安心感と、自己の連続性に対する安心感が表裏となるような質の近いものであることが示唆されていると言えるのではないだろうか。

また「悪い対象」因子は、特に他者が目の前から居なくなった途端に急変して「悪い人」にならないことをわかっているという感覚を表す内容である。対象が実は自

分を快く思っておらず、容易に攻撃をしてくるような、安心感の持てない表象であるという感覚が、自己信頼感総得点に負の相関が見られたこともまた、その人の内界に存在する表象に対する信用できなさ、自分に対する信用できなさといったものが、表裏一体のものであることを示してはいないだろうか。

次に因子「他者との関係を通した自己への信頼」においては、内的対象尺度総得点 ($r = -.362$) および「良い対象」($r = -.368$)との間で中程度の相関が得られた。「良い対象」はこの因子以外とは微弱な相関しかみられなかった。F2「良い対象」因子における内容は、目の前に居ないが良い表象を想起する能力に関する項目であり、他者が自分に対して迫害的でなく、自分に対して肯定的な評価をしていると感じられる項目を含んだ因子である。他の因子に比べて他者の自己に対する意識や関心が内包されているという意味で、他の因子との関連が低かったものと思われる。

最後に、因子「自己の統制に対する信頼」は内的対象尺度総得点およびそれぞれの因子において弱い相関しか得られなかった。因子は、自分が衝動的になったり、意図せずして相手を傷つけてしまったり、自分勝手に振る舞ったりすることのない、統制可能な存在であるという安心感を表した内容である。自己信頼感尺度の中でも因子間相関の低さからも言えるように、やや異なる側面からの信頼感を測定している可能性がある。ただし、自己の統制に関する効力感といったものが、質問紙という方法において、内省によって意識面から測定できるものであるのかということについては、検討の必要があると思われる。

IV. 総合考察

本研究では、まず自己信頼感尺度の作成を試みた。そ

Table 3
自己信頼感得点と他者信頼感得点の相関

	自己信頼感総得点	因子	因子	因子	因子	因子
内的対象尺度 総得点	-.560**	-.372**	-.402**	-.362**	-.413**	-.248**
継続しない対象	-.441**	-.298**	-.448**	-.219**	-.368**	-.248**
良い対象	-.165**	-.179*	-.049	-.368**	-.128*	.080
悪い対象	-.398**	-.281**	-.324**	-.219**	-.318**	-.274**

** $p < .001$ * $p < .05$

の結果5因子が抽出され、それぞれは「自分が壊れてしまわないという信頼」「自信のなさ」「他者との関係を通じた自己への信頼」「自己の連続性に対する信頼」「自己統制に対する信頼」と命名された。さらに、尺度全体において十分な整合性があることが示されたため、全項目得点の合計値をもって自己信頼感全体得点とされた。

次に、自己信頼感尺度と内的対象尺度との関連を検討するために、両尺度の総得点間および因子間における相関を求め、これらの結果から、以下の示唆が得られた。第一点目は、自己信頼感尺度と内的対象関係尺度それぞれの総得点間において有意な相関が得られたことから、これらの尺度の関連性が認められた。中でも、「継続しない対象」との間で $r = -.441$ の値が得られ、また因子1、因子2においても中程度の相関が見られた。「継続しない対象」との関連は、例えば自分の見ていないところでも対象が同じ状態で存在しているということに対する信頼と、自分が過去から未来へと繋がる同じ自分であり、突然豹変したり「自分ではない人」になったりしないという信頼とが関連していることを意味していると考えられる。このことは、安定した対象を内在化されていることが自己の安定と存続への感覚に繋がっていくというEriksonの理論を支持するものと思われる。その意味で、青年期の自分に対する信頼感は、単なる他者による評価を通してのみ学習され得られる、青年のそのときの現実における環境依存的なものだけではなく、人格形成の早い段階から維持されてきたものを含んでいる可能性が示された。

第二点目は、因子1「自分が壊れてしまわないという信頼」においては内的対象尺度総得点との間でのみ相関が見られ他の因子との関連が弱かった一方で、ほぼ逆転項目から構成される因子2「自信のなさ」において「継続しない対象」との相関が得られ、また「悪い対象」においても若干弱いながら $-.324$ の値が得られ、因子3「自信のなさ」の方が因子1「自分が壊れてしまわないという信頼」よりも自己信頼感全体の傾向を反映し、安定した対象を内在化している度合いとの関連が強かったことである。そもそも逆転項目群がひとつの因子としてまとまりを得たことも鑑みると、因子1と因子2が自己

信頼感における単なる正負の関係を示すのものではなく、異なる質・水準を示している可能性を考慮する必要があると考えられる。因子1の内容に注目すると、ここで測られているものは青年が現実の日常生活の中で自覚できる「自分が大丈夫である」というポジティブな感覚である。一方因子2で測られているものは、その表層的な感覚の裏返しではなく、自己への関心・他者への過敏性が高まり、自己の価値や存在といった基盤が揺らぐ青年期的な不安に強くかかわっているのではないかと思われるのである。天貝(1995)の作成した「信頼感」尺度においても、「自己への信頼」「他者への信頼」「不信」の3因子が抽出されており、「不信」の項目の中には他者に対する不信感、自己に対する不信感の双方が含まれている。このことから、これらの尺度の測っている「信じられなさ」に関する項目を異なる側面から考えるべきであることが示唆され、さらなる検討の可能性が示された。

第三点目は、因子3が他の因子及び内的対象尺度との関連が低かったことから、自己信頼感の中に内包されたと考えられた「自己の身体的・精神的統制に対する信頼」についてさらなる検討の余地が残されたことである。

本研究では青年期の信頼感のなかでも外的な現実での人間関係に依拠する対他的な信頼感ではなく、より青年の内界に根ざした対自的な信頼感について、質問紙法によって接近することを目的とした。結果として因子の内容に注目すると、同じ質問紙の中でも異なる意識水準の感覚を反映している可能性が窺われた。このことから、質問紙法のみではなく投映法など異なる技法を組み合わせることによって、青年期の自分に対する信頼感について異なる角度から立体的に検討できることが推測され、更なる検討の必要性が示唆された。

以上、本研究では青年期の信頼感についての意識的な側面にアプローチした尺度が作成され、その構造が検討された。

引用文献

青柳肇・酒井厚(1997). アダルト・アタッチメントと

- 回想による幼少期のアタッチメントとの関係 早稲田大学人間科学研究, 10(1), 7-16
- 天貝由美子 (1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364 - 371
- 天貝由美子 (1997). Self-esteem を規定する要因としての信頼感 その生涯発達の変化 カウンセリング研究. 30(2), 103 - 111
- Bowlby, J (1969). Attachment and Loss: Vol.1. Attachment. London: Hogan. [黒田実郎 1991 母子関係の理論 .愛着行動 1991 岩崎学術出版]
- Bowlby, J (1973). Attachment and Loss: Vol.2. Separation. London: Hogan. [黒田実郎 1991 母子関係の理論 .分離不安 岩崎学術出版]
- Bowlby, J (1980). Attachment and Loss: Vol.3. Loss. London: Hogan. [黒田実郎 横浜恵三子 1991 母子関係の理論 . 対象喪失 岩崎学術出版]
- Erikson, E. H. (1950). Childhood And Society [仁科弥生訳 1977 幼児期と社会 みすず書房]
- 金田一京助 (2001). 新明解国語辞典 第5版 三省堂
- Mahler, M. S. (1972b). Rapprochement subphases of the separation-individuation process. International Journal of Psychoanalysis. 53, 333-338
- Masterson, J. F (2000). [佐藤美奈子 成田義弘訳 2007 パーソナリティ障害 星和書店]
- 酒井厚 (2001a). 青年期の愛着関係と就学前の母子関係内的作業モデル尺度作成の試み 性格心理学研究, 9(2)
- 酒井厚 (2001b). 青年期の親密な他者との関係における信頼感 ヒューマンサイエンスリサーチ (早稲田大学大学院.早稲田大学大学院人間科学研究科) 10, 79-93
- 酒井厚・菅原ますみ・真栄城和美 (他) (2002a). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, 50(1), 12-22
- 酒井厚 (2002b). 青年期で経験するネガティブ・ライフイベント 精神的健康を損ねるのを防ぐ親密な他者との対人的信頼感 山梨大学教育人間科学部紀要, 4(2), 194-201
- 重松晴美 (2005). 青年期における孤独感および内的対象の早期に関する研究 境界例心性を通して 心理臨床学研究, 22(6), 659-664
- 谷冬彦 (1998). 青年期における基本的信頼感と時間的展望 発達心理学研究, 9(1), 35-44
- 鏑幹八郎 (2002). 鏑幹八郎著作集 アイデンティティとライフサイクル論 ナカニシヤ出版

Appendix
内的対象尺度項目 (重松, 2005)

No.	項 目
F1 < 永続しない対象 >	
19	しばらく連絡がないと、もうその人から嫌われてしまったのではないかと心配になる
26	絶えず会っていないと、関係が切れてしまうような気がする
21	手紙を出してもすぐ返事が来ないと、相手の気を悪くしたのではないかと気になる
16	私一人が席をはずすと、みんなが私の悪口を行っているような気がする
35	仲の良い人でも、次にどういうふうに 出るのが予測がつかず不安だ
1	友人と久しぶりに会うとき、以前と同じように話ができるか不安だ
27	自分の意見を反対されると、その人は自分のことを悪く思っているような気がする
34	昔のことを考えると、いやな記憶ばかりよみがえる
13	今は親友であっても、この先けんかして別れることになるのではないかと心配になる
2	親しい人でも離れていると、その人が存在しているという確信が持てない
F2 < 悪い対象 >	
30	私は、親しい友人に対しても何らかの疑いを持っている
29	人から優しくされても、つい疑ってしまう
25	離れていると、その人の嫌な面ばかり思い出してしまう
31	ふと目が合うと、その人が自分のことを快く思っていないように感じる
24	仲のよい友人であっても、私が成功すると心のどこかで妬むだろう
23	一緒にいるときと離れてしまうときで、その人への態度が極端に変化してしまうことがある
5	好きな人でさえ、憎くて憎くてしょうがないときがある
14	みんなと協力して何かに取り組んでいても、連帯感がわからない
F3 < 良い対象 >	
7	どんなときでも誰かが自分を見守ってくれているような気がする
36	自分の大切な人が亡くなっても、その人はこころの中に生き続けていると感じる
28	人からの自分に対する親切言葉や行動はこころの中に刻み込まれている
3	親友が本当に私のことを心配してくれたことを、これまで一瞬も忘れたことはない
10	落ち込んだとき、誰か自分の味方になってくれそうな人のことを思い浮かべる
15	何か決断するときに、「あの人だったらどうするだろう」と考えることがある